

海外の窓から見えた日本の幼児教育

松本信吾

海外の幼稚園を視察すること

昨年の秋に、スペインとフランスの幼稚園や学校を視察する機会を得ました。海外旅行をして初めて自分の国のことが見えてくるとよく言われるように、海外の幼稚園を視察することで日本の幼児教育について初めて気づく部分も多いと感じています。私は幸いにも、何度か海外の幼稚園を視察しましたので、その経験を通して気づいたことや感じたことを、書かせていただこうと思います。はじめにお断りしなければなりません、ここで記す内容は、あくまでも私個人が経験し感じたことなのです。

で、客観性に欠ける面があると思いますし、その国の教育事情全体を表すものとはなっていない面も多々あると思います。その点を了承していただきながら、一保育者の感想として、お読みください。

衝撃的だったスウェーデン

初めて海外の幼稚園を視察したのは、スウェーデンでした。六年前のことです。海外の幼稚園についての知識をもっていないなかった私にとって、それは衝撃的でした。一番驚いたのは、一クラスの人数が少ないこと、そして、保育室などの環境が充実していることでした。一ク

ラスの人数は二十人程度で、幼稚園には、メインの保育室のほかに、アトリエ部屋、絵本部屋、ままごと部屋、工作部屋などが用意されていました。その中で行われる保育は「遊びが中心」「幼児の興味や関心を大事にする」という日本と共通するものでした。自然を大切にしているのも日本と同じで、いや日本以上に自然とのかかわりを大切にしていることを感じました。

さらには、幼児の関心をもとにした少人数のプロジェクト活動が行われていたり、幼稚園児が小学校の授業に自由に行き来して授業に参加したりするなど、幼小連携も自然な形で進んでいました。

このような豊かな教育環境を支えている背景には、国民一人ひとりの幼児教育に対する意識の高さがあると思います。ホームステイ先のご主人に、三十五人のクラスを一人で担任している、と話したところ、*“terribly (恐ろしい)”*と言われました。そんな環境でよい保育ができるのか、と問われたわけです。彼は教育とは無関係の仕事をしてきた人ですが、幼児にはよい教育環境を与え



▲森の中での集いが毎日行われていました。

るべきで、そのための必要な税金は使うべきだと考えていました。彼に代表されるように、国民全体に教育に対する高い価値が形成されていることを感じました。

スペイン・フランスの印象

その後、オーストラリアやドイツの視察を通して、クラス規模に関しては、日本の三十五人学級のほうがむしろ異常だということが見えてきましたし、幼児の学びや評価に関しても、日本はすべきことがたくさんあることを感じていました。

そしてこのたび、スペインとフランスの幼稚園や学校を視察する機会を得ました。スペインは、大変景気のよい状態が長い間続いています。国力が上がっている中、以前の「ピレネー山脈を越えたらアフリカ」と言われていた時代を払拭しようと、教育費にかなり高い割合で予算を割り当てています。その象徴が英語教育と科学教育です。国際的な競争力を身につけようとしている姿勢が、国全体から感じられました。



▲コンクリートの上で遊ぶ子どもたち。
遊びの時間も空間も保障されていませんでした。



▲文字の勉強をする4歳児。
遊びは、やはり「休み時間」に行われていました。

そのような背景もあるのでしょう、案内された一つは、バイリンガルの幼稚園で、半分の授業（活動）は、先生が英語のみで行っていました。ここに「授業」と書いたように、幼児期から、かなり組織的に時間割が組まれ、その合間が「休み時間」としての遊びの時間でした。しかもその場所は、コンクリートの上でした。

驚くべきことに、この学校は公立です。このようなバイリンガルの幼稚園や学校は大変人気があるので、訪問した州では今後増やしていく方向なのだそうです。

また、幼稚園に入る前の一歳から三歳までの子どもたちを対象にした保育所を訪問したのですが、そこでは、しつけと学習を重んじた活動を行っており、先生がとても厳しく、子どもたちは黙って先生の言うことを聞かされてきました。その先生方は、自分たちの実践は、保護者からも進学する幼稚園からも高く評価されていると自負していました。この二つの施設がスペインの代表だとは思いませんが、国としての教育の方向性を指し示していると感じました。

一方フランスでは、一般的な幼稚園を訪問しましたが、ここでも幼児期からの組織的な勉強が行われていました。特に読み書きを中心にしたカリキュラムが組まれ、一人ひとりの到達度を考慮しながら勉強するスタイルができていました。通知票のような到達度表もあり、規準に達しないと、留年してもう一年その学年をすることもあるそうです。

フランスのこのような背景には、移民の問題や失業者の問題で、家庭での教育が崩壊しているという危機感があるようです。親の養育が機能せず母語も話せない子どもが多いという現状、またそのような子どもたちが将来犯罪に手を染める危険が高いという認識から、幼児期に基礎的な学力を身につけさせることに重点を置いた教育が行われていました。

制度としての日本の遅れ

スペイン、フランスの状況に比べると、遊びに価値を置くことのできる日本の状況は恵まれていると言えるで

しょう。しかし一方で、制度の面に目を向けると、スペイン、フランスともに三歳児以降の公教育は、私立幼稚園も含めて無償ですし、一クラス二十人程度のクラス運営がなされています。また、幼稚園教師の資格も、大学卒業以上で、小学校教師と同じ資格になっているために、教師の質の面でも日本より優れているかもしれません。

また、日本の幼児教育は、幼稚園教育要領に示されている理念としては世界に誇れるものであり、他国の先生方も「すばらしい・うらやましい」と認めてくださるものでしたが、現実にはそれぞれの幼児教育機関によってあまりにバラバラの教育内容が営まれているのが現状なのは、周知のとおりです。

海外視察を通して見えてきたこと

このように見えてくると、教育は国の事情によってずいぶん形が変わることが見えてきました。特に幼児教育はその傾向が強いように思えます。海外の幼稚園視察を通

して、大切にしたいと感じたことを最後に記したいと思っています。

① 幼児の主體的な活動を大事にした保育を

現在日本で行われている遊びを中心とした保育は、即物的な学習効果に目を向ける必要がない恵まれた状況だからこそ可能だとも言えます。読み書きや計算などの目に見える能力の伸長を求める声が大きくなっている中、私たちは、遊びの意味を見つめ直し、その豊かな価値を再認識する必要があると感じています。

② 教育制度に対する多面的な視点を

海外に目を向けると、教育を取り巻く制度は実にさまざまです。日本のほうが非常識だと思えることもたくさんあります。制度そのものを個人で変えることは難しいでしょうが、日本でのやり方を当たり前としないで、ほかのやり方や考え方もあるという視点の広がりをもつことは必要だと考えます。

③ 幼児教育に対する価値形成を

幼児教育は、それぞれの国の教育観、幼児観がよく現れています。スウェーデンの幼児教育を支えているのは、高い税金でもありますが、“terribly”に象徴されるように、幼児教育に対する価値観だと思います。価値観が、幼児教育の質を向上させているのです。一方、日本はどうでしょうか。幼児期の教育は、非合理的であり、目に見えにくい面が大きいので、近年小学校に合わせたような合理性や評価を取り入れようとする動きが大きくなってきているのではないのでしょうか。また、幼児より保護者ニーズばかりをめざしている幼児教育施設も増えているように思います。幼児教育に対する価値観は決して高いものとは言えないのが現状でしょう。

幼児教育に対する価値を形成し、質を高めていくためには、私たち幼児教育関係者が、幼児教育の価値を実践を通して発信していくことが必要でしょう。海外の窓から日本の幼児教育を見て、その使命を強く感じています。

(広島大学附属幼稚園)